

一見鐘情

～教室の若い人達～

長崎大学大学院移植・消化器外科

兼松 隆之

－ 序にかえて －

「六十の手習」とは、六十歳に達して新しいものを始めることではない。若い時から手がけていたことを老年になってからやり直すことだ」。これは白洲正子が友人から聞いた話として、著書の中に紹介していることば一節である。

私も 2005（平成17）年7月8日で満60歳を迎えた。還暦である。人生の暦が一回りしたことになる。この区切りは今までやってきたことや考えてきたことを顧みて、やり直すのに良い機会かと思いついた。それをまとめたのが、この小冊子である。

書き進むと、自分が思っていたことと実際に行ってきたこととのギャップの大きさに、我ながら忸怩たる思いもある。だが、若い諸君のために、私の思いを記しておくことも無駄ではないだろうと考え、ことここに至った。

この小冊子は「一見鐘情」というタイトルにした。その言葉の中国での本来の意味は“一目惚れ”である。だが、ここでは“思いが一つのところに集まって心熱く、動かない”、ということを図して、この名称を付けた。

この小冊子が少しでも教室の若い人達のお役に立つならば、私にとってこれに優る喜びはない。

平成18年11月吉日

兼 松 隆 之

はじめに

- (1) 人生で持っておきたいものは夢と情熱と、そして人としてのほのぼのとした温か味である。
- (2) 外科医はコドモのみずみずしい感性を持ち続け、かつ、オトナとしての豊かな知性を備えておかねばならない。感性は想像力をはぐくみ、新しき発展の着想に繋がる。知性は経験を重ねることで、卓越した技術を身に付け、確固たる医療の基盤を作る。
- (3) 常に自分で目標を持つことが必要だ。それも実現できるかどうかちょっと疑わしいくらいの高い目標がよい。「志小なれば足りやすく、足りやすければ進むことなし」(近思録)
- (4) 正直であることは、後々信頼を得るための大きな要素となる。
- (5) 物事に情熱を持ってことにあたること。そして、あきらめず粘り強くやることである。そうしたら、たいがいの道は拓ける。
- (6) 仕事上の情熱は常に持っておかねばならない。どうしたらもっと良くなるか、どうしたらうまくいくか、どうしたら解決するか、と考え抜くことが大切だ。夜も眠れないほどの情熱をたぎらせることができれば幸せだ。
- (7) 「継続は力なり」はまさに至言。成功の秘訣の第一歩は、良いと思って始めたことは、止めないことである。何事も最初は形にならない。やっていれば姿が見えてくる。そうして、ついには形ができてくる。
- (8) 品物でも新しいうちは物珍しく、珍重されがちであるが、やがて飽きられる。しかし、それを使い続けると味が出てくる。そうしたらしめたものだ。
- (9) リスペクトとは粉骨砕身、力を尽くした人にこそ向けられる。それが他人や社会のためになされた業であればなおさらだ。
- (10) 責任ある職・地位を得たら、社会のために率先して仕事をする姿勢が必要だ。自分のことだけをやるのが許されるのは修行時代だけである。

- (11) 人の言うことに聞く耳を持たねばならない。そうでなければ、やがて人は忠告や助言をしにくくなる。
- (12) 自分の意見を正当に述べることができるように、常に心がけ、訓練をしていなければならない。
- (13) ほんとうに困った時に相談したいと思うのは、日頃、耳障りのよいことばかりを言う人ではない。時には耳の痛いことでも誠意をもって進言してくれる人こそ、究極的には頼りになる。
- (14) すぐ役立つことは、すぐ役立たなくなる。いまの時代、早く結果を出すことが求められがちだ。すぐには役に立たないことでも、コツコツと根気よく続けることも大事だ。
- (15) 人からの頼まれ事は迅速にレスポンスすることが大切である。正確さも必要だが、スピードも重要だ。もし、回答を示すまでに時間がかかるのであれば、簡単でもいいから依頼者にその旨、連絡を入れることが望ましい。その行為の積み重ねが信頼に繋がる。
- (16) 上司への連絡、報告は常に心がけておくこと。組織を運営するためには、情報を持っておかねばならないからである。
- (17) 「地位が人を作る」という言葉がある。それなりの地位につけば、情報が集まる。情報量が豊富になれば、それだけ物事への対応の仕方がおのずとできやすくなるので、地位が人を作ることになる。
- (18) 社会人としてのマナー、すなわち手紙の書き方や電話応対など社会通念を知っているに越したことはない。若い時は知らなくて済むことでも、それなりの年齢になり、地位を得てからは、社会的常識をわきまえていないと損はしても、得することはない。
- (19) いつの時代でも礼節は重んじねばならない。礼儀正しいことは、周囲の人々から受け入れられる第一歩となる。

- (20) 一番多感な年齢の高校球児が甲子園での試合に敗れて、なぜ、人前であれほど号泣できるのか。それは彼らが高校生活の中で、青春の一時を野球に捧げてきたからに他ならない。遊び半分の部活であれば、ああはいかない。一段落したとき、涙が流せるくらいの情熱をもって物事に組みたい。
- (21) 人脈は大切だ。しかし、人脈を築き上げるのには気の遠くなるほどの時間と努力の積み重ねが求められる。そして、少しの不義理で壊れることも心しておかねばならない。
- (22) 多くの友を持つ。若い時期に自分と同じ領域を選考している他大学の外科医等と友人となることは、生涯の友となりうる。また、医学以外の世界に生きる友人も持ちたい。それは大きな財産だ。
- (23) 記録は大切だ。将来、必要となるかどうかは別として、スナップ写真も含め、記述の記録を残しておく、思わぬ役に立つことがある。自らの足跡を確かめる上で、日記を付けることも推奨される。
- (24) 時間に正確でなければならない。それにはそれなりの努力がいる。地位の高い人ほど時間を守る。時間を守れる人が高い地位につくのかもしれない。
- (25) 自慢話はほどほどに。自慢話で気持ちがいいのはそれを自慢している本人だけである。聞いているほとんどの人は、いやになるか、うんざりしている。
- (26) ぜひ、聞き上手になりたい。相手が言い終わらない時に、すぐにその言葉尻をとるような発言は控えたい。言葉尻をとられる会話になると、話している方にはプラストレーションが溜まる。話をゆっくり聞いてもらえると、半分は満足する。
- (27) 人が話をしているときに、腕時計をチラッと見るのは失礼極まりない。思わずやりがちな所作であるが、重々気をつけておきたい。
- (28) 診療にあたる時は、それなりの服装で行うべきだ。男性であればネクタイ着用が望ましい。女性はあまり華美なものは避けたが無難。サンダル、つっかけ等も避けたい。白衣のボタンも留めておくことを心がける。

臨床について

- (1) 原理はいつまでも変わらない。だが、教科書の中味は過去のもの、というくらいに考えておいた方がよい。少し疑いのまなざしを向けながら、教科書を読む位でもよいのではないか。新しい外科学を患者さんが教えてくれる。そこから学んだもので教科書の内容を書き換えるくらいの気概が若者には欲しい。
- (2) 臨床は経験の積み重ねが大切である。それだからこそ、一例一例を大事にし、しっかりと対峙していくことが必要となる。患者さんは何かを教えようとしてくれている。それを学んで自分のものにするかどうかは、臨床医の心がけ次第である。
- (3) 日々は着実に過ぎていく。忙しい日常の診療の中では、患者さんの対応に追われがちである。そのような中で一人一人の患者さんから学ぶ姿勢を常にもち続けていなければならない。患者さんの状態に一喜一憂をしているだけでは進歩がない。
- (4) 外科医はリサーチ・マインドを常に持ち続けねばならない。日常の診療を行う上では経験の積み重ねでも不足はないかもしれないが、さらに正確な診断を下し、新しい治療を開拓していくために欠かせないのがリサーチ・マインドだ。
- (5) 外科医には反省が不可欠だ。それが進歩に繋がる。その意味で、自分が経験した症例の記録を大切にすることである。また、その治療成績をある一定期間ごとにまとめて、自分がやってきたことの反省をしていくことも臨床医の責務である。
- (6) 卒業後の1年間の医師の知識、技量は急勾配の伸びを示す。2年目も同様。しかし、年月が経つにつれて、知識は増え、技量も向上するものの、伸びの勾配は年毎に緩やかにならざるを得ない。だから、もっとも急勾配に伸びることのできる時期には、なりふり構わず、外科の修練に没頭すべきである。この時期にそれをやるかやらないかは、外科医としての生命に関わる。
- (7) 外科手術は若い時期に基本をみっちり習得することが必要である。そして、できるだけ早い時期から手術を経験することが、その人の腕を上げることにもなる。晩年からの経験では、その伸びも緩やかとならざるをえない。
- (8) 糸結びをみれば、その人の外科手術の技量が大体わかる。糸結びは外科医になりたての時に、自らをしっかりと訓練することが大事だ。

研究について

- (1) 臨床医は患者さんの状況に合わせて適切な対応をしていれば、良い臨床医とみなされる。ところが、研究は自らが動かないと物事は絶対に進まない。自分で計画し、試験管を振り、そして得られた結果を解析しなければならない。すなわち、研究とはすべて自分で動かないと埒があかないものである。ここが臨床と研究との大きな違いである。
- (2) 研究には自主性と主体性が求められ、これを遂行していくことは苦しい。しかし、自分が予測していた通りの結果であれば、もちろん、全く予測していなかった結果であっても、いままでわからなかったことを明らかにすることのできる知的喜びは、何にも代えがたい。それが少しでも患者さんに貢献でき、ひいては人類の幸福に繋がれば望外の喜びである。
- (3) 研究では、行う前に結果を予測しすぎないこと。時に、結果をネガティブに予測し、実験に着手しない人がある。しかし、実験というものはやってみなければわからない。予想もしなかったような結果が出ることもある。そして、それが真実であることが少なくない。得てして、それが大発見に繋がることもあるのを歴史が物語っている。
- (4) 研究にはできるだけ綿密な計画が必須である。その時の手段として、計画を立てる時点で仕事が完成したときにまとめる論文構成を頭に描いてみるとよい。そうすれば必要な細かい計画が立てられる。
- (5) 10の試行で、1のポジティブ・データしか得られないのが研究である。しかし、9のネガティブ・データは決して無駄ではない。1を試行して1の結果を得たのと、10の試行で1の結果を得たのとでは、同じ1でも1の重みがちがう。後者こそ研究の真髄を垣間見ることができる。そして、研究で創意工夫を重ねた苦しい経験を持つ者こそが、後輩のよき指導者となれる。
- (6) 研究は苦しいが、苦しければ苦しいほど、それを論文に仕上げ、学術誌に掲載されたのを見るとときほどうれしいものはない。

- (7) 医師になって 50 年勤務するとする。毎日、10 名の患者さんの診療に当たり、年間 300 日働くと、生涯では約 15 万人の治療にあたることになる。もし、研究で新たに病因を発見し、治療法を開発できたら、その 10 倍、100 倍の人を救うことができるかも知れない。研究のすごさ、魅力はそこにもある。

学会発表について

- (1) 学会発表をする内容は、発表することの必然性があるかどうかを常に考えておかなければならない。これをどうして発表しなければならないのか、ポイントはどこか。聞いた人が「なるほど、そうだったのか！」と膝をポンと打つような発表をしたい。
- (2) 必然性がある学会発表は、発表だけで終わるべきではない。論文にまとめてこそはじめて仕事が仕上がる。
- (3) 学会発表を論文作成までにつなげるもっとも良い方法は、学会発表の抄録を提出したら、時間をおかずに論文作成に着手することである。通常、抄録提出から実際の発表までには数ヶ月あるので、その間に論文にまとめておくことだ。そうすれば、学会での発表は自信を持って行えるし、もし、発表時に貴重な助言がもらえれば、直ちに論文にその助言を活かすこともできる。
- (4) 学会発表後に論文を書こうと思うのなら、少なくとも一週間以内に論文作成に取り掛からねばならない。それ以上の時間を置くと、再度その仕事に着手するには、かなりのエネルギーを要する。
- (5) 口演のためのスライドは、聴衆に理解しやすいものでなければ意味がない。その内容に初めて接する人に、約 10 秒程度で理解してもらうためには、スライド作りにそれなりの工夫と努力が求められる。とても読めないような **busy slide** は、あつても何の役にも立たない。字の並列はせいぜい 10 行までが望ましい。図や表を使って、いかに短時間に理解してもらうか推敲を重ねることが大事だ。
- (6) 学会発表の構成では“目的”と“結語”とが繋がるものでなければならない。時として“目的”で述べたことと“結語”での内容がかけ離れたものが見受けられる。両者がうまくかみ合っているかどうかを確認のためには、目的のスライドと結語のスライドとを並列して見比べてみるとよい。

- (7) 学会発表でのまとめのスライドでは、表面的な表現で済ませるのではなく、可能な限り、踏み込んだものとしたい。そうでなければ、聴いている者に迫力が伝わらない。
- (8) スライドは見た目にきれいであるに越したことはない。だからといって、数種類の色を使って見た目の“きれいさ”を求めるのは本道ではない。色をつけるなら、その色づけをすることで人の目に像が残るような工夫をすることだ。
- (9) 苦勞して作ったスライドこそ、いつまでも愛着がある。
- (10) 自分をアピールするためには、質問をすることだ。10回の発表をするよりも、気の効いた質問を一つするほうが数倍効果がある。
- (11) 良い質問をするには、それなりの心構えと準備が必要だ。まず、学会に行く前に抄録を精読し、下調べをした上で、どのような質問するかをあらかじめ準備しておくとうい。そして、ターゲットとした演題の発表を十分注意して聴き、それから質問するとよい。
- (12) 質問するのはかなりの勇気がある。まず、質問することに慣れることが大事。学会に参加したら、必ず一つは質問をしてくる、というような目標を立てておくのもよい。

論文について

- (1) 論文を書くことの難しさも、自らが動かねば形にならないことにある。論文を書くことは“無”から“有”を作り出すことであるから、生みの苦しみがあるのは当然だ。しかし、一度形になったものはいつまでも残る。それを目にする時の喜びは、何にも代えがたい。そして、それが医学の進歩に繋がれば、それ以上の喜びはない。
- (2) 「画龍点睛を欠く」という言葉がある。実験はやったし、それなりの結果も得られた。なのに論文を書かない。これは本人の怠慢以外の何ものでもない。自分がやってきたことを論文にまとめれば、人とその情報を共有することもできる。また、自分がそれまで何をやってきたか、また、その研究がどういう位置づけになるのか、などの反省点にも立てる。そして、次のやるべき仕事が見えてくる。

- (3) 論文には、それまで積み重ねた研究のネガティブ・データが行間にぎっしりと詰まっている。自分で論文を書いた経験があれば、他人の論文を読んでも行間にあるネガティブ・データの重みが慮られる。自分で苦労してみて、初めてわかることである。この面から言っても論文を書くことは大切なのだ。

- (4) 研究から得られた結果は複雑に考えずに、できるだけ単純なものにして受け止めるのがよい。結果が何を語っているのかを大つかみすることを、まず考えるべきだ。それには結果を簡単な図や表にして、それをじっと眺めることが良い手である。自ずと結果が語りかけてくれる。

私の好きな言い回し

- 筆を動かしてみないと、考えは浮かばぬし、進展もしない。
(小林秀雄：“考えるヒント”)
- 後世への最大遺物とは何か。それは“勇ましい高尚な生涯”である。
(内村鑑三：“後世への最大遺物”)
- ひとりの人を理解するまでには、少なくとも、一トンの塩をいっしょになめなければだめよ。
(須賀敦子：“塩一トンの読書”)
- 昨日までは序章。人生の本舞台は常に将来に在り。
(尾崎行雄)
- 進むときは人に任せ、退く時は自ら決せよ。
(河合継之助のせりふー司馬遼太郎：“峠”)
- 他人の中傷に対して、どこまで弁解せずにおられるか。これを試してみるのも人間修業の一つだ。
(近藤信男)
- 稽古とは 一よりならい十を知り 十よりかえる もとのその一。
(千 利休)
- 実があるなら今月今宵 一夜明ければ たれも来る。
(高杉晋作)
- 勝ちに不思議な勝ちあり。負けに不思議な負けなし。
(東北楽天ゴールデンイーグルス監督・野村克也)
- “人望”とは何か。良寛の遺偈に「うらを見せ おもてを見せて 散るもみじ」という句がある。人間には必ず裏と表がある。表のいい部分だけでなく、自分の弱みや裏の部分すべてを見せても、それでもなおかつ部下や周囲の人たちから尊敬される人物であること。また、人間は本音と建前で生きているが、本音を推し通し過ぎれば組織は混乱し、建前ばかりでは信用を失う。だから、本音と建前の距離を短く保つように懸命に努力すること。ほんとうに信頼されるのは、本音で語る人でもなければ、建前

だけの人でもない。その距離の短い人だ。

(江坂 彰：“歴史に学ぶ人間学”)

- 小事は情をもって処し、大事は意をもって決す。

(東京電力社長 平岩外四氏)

- 上、三年にして下を知り、下、三日にして上を知る。

(伊藤 整：“不滅の帝王学”)

- 決断力のない君主は、当面の危機を回避しようとするあまり、多くの場合、中立の道を選ぶ。そして、おおかたの君主が減んでいく。

(マキャヴェッリ：“資本論”)

- 偉大な人間は、どんな環境に置かれても常に変わらない。これと反対に“弱い人間”は幸運に恵まれると有頂天になり、それは本来ありもしない自分が“実力”のお陰だと錯覚する。しかし、まもなく運命の逆転にみまわれるとどうなるか。彼らの表情にありありとそのことが表われ、とたんにうって変わって弱みに沈んで行き、卑怯な卑屈な人間に成り下がる。

(マキャヴェッリ)

- 運命に逆らわぬことが結局は運命に勝つことである。また、20代では良き師に、30代では良き同僚に、そして40~50代では良き後輩に出会うことが大切だ。

(東大教授：沖中重雄)

- 最小の努力で最大の効果を狙う工夫も必要ではあるが、最小の効果を得るために最大の努力をする心構えもまた大切である。

(九大教授：井林 博)